

県がエアコンのない高校への設置検討を約束

9月25日の県議会代表質問で、県立高校へのエアコン設置を求めた日本共産党の丸山慎一県議にたいして、教育長が「来年夏に向けて、普通教室に空調が設置されていない高校への整備を検討」と答えました。高校生や保護者を始めとした世論と運動の結果です。

全額公費設置の神奈川県を例に迫る

県立高校全123校のなか

で教室にエアコンが付いていない学校が20校も残されています。これらの高校では、熱中症で教室から救急搬送される生徒もいました。

一方、20校以外の県立高校では教室にエアコンがついていますが、騒音対策で窓が開けられない5つの高校以外

は、保護者がお金を出してエアコンを設置しています。これではとても「県立」とは言えません。

神奈川県でも設置されていない県立高校や保護者が負担している高校がありました。3カ年計画を立てて、すべて県負担に切り替えました。現在、神奈川県ではいつさいの保護者負担なしで、県立高校144校すべてにエアコンが設置されています。普通教室



県議会本会議の代表質問終了後に傍聴に来ていただいた方々と懇談する丸山慎一県議

9月25日、県議会での日本共産党代表質問終了後、傍聴に来ていただいた方々と懇談しました。「県側の答弁があまりにもひどすぎる」「共産党の質問は良く事実を調査して準備したものだと感じた」など、活発な感想が出されました。丸山慎一県議は、「共産党の議席を増やして、野党と市民との共同も進めて頑張りたい」と述べました。

や職員室はもちろんのこと、音楽室や図書室など特別教室にも一部を除いてエアコンがついています。

丸山慎一県議は神奈川県の場合も示して、「千葉県でもエアコンのない高校に、来年夏に間に合うようにエアコンを付けるべきだ」と質しました。

これにたいして「来年夏に向けて検討する」との答弁があつたものです。また保護者負担についても「検討する」と答え、見直しを示唆しました。

来夏の設置は12月議会で予算必須

再質問では、「設置工事は長い休みの時しか出来ない。

今度の冬休みは予算が間に合わないのので、来年夏に間に合わせようと思ったら、春休みの工事が最後のチャンス。そのためには12月県議会に補正予算を提出するしかない」と迫ったところ、教育長から「全力で取り組みたい」との答弁がありました。

職員室のエアコン設置は後回し

県立学校では、職員室にもエアコンが付いていません。

年以上かかります。

しかも今年の夏、県教委の調査でも松戸南高校の職員室は34・7度、千葉北や柏中央などは35度、流山北高校に至っては39・4度を記録しており、とても我慢できるものではありません。

子どもたちの安全確保は当然ですが、教職員の安全確保も、ないがしろでいいはずがありません。学校の教育環境の整備、労働条件の改善のためにも、職員室のエアコン設置も緊急課題として進めるべきです。

「郷土への誇りと愛着」の強制は文化芸術振興条例とは相容れない

県議会に自民党などが「文化芸術の振興に関する条例案」を提出しました。

内心の自由を侵す条例は許されない

積極的な内容も含まれていますが、最大の問題は前文の「郷土への誇りと愛着を深め」という部分です。

郷土に誇りや愛着を持つかどうかは、個人の「心の中」の問題であり、自由であるべきなのに条例で強制することになるからです。

本来、県がやらなければならぬのは、「誇りや愛着を持つ郷土」をつくるために、住民合意にもとづいて努力することです。提出者は、「誇りや愛着を深めていきたい」ということであつて、強制するものではない」と述べましたが、もし

もそうなら、この部分は削除すべきです。

しかも提出者は、「地域で祭りなどの担い手が不足している。だから書いた」と主張しました。しかし「担い手」確保のために、「誇りや愛着を持つ」との条例を作るのは本末転倒です。

「担い手不足」は、少子化対策や高齢者福祉に背を向けた、地方を切り捨ててきたこれまでの政治に要因があります。「誇りや愛着」を持つにしても、泣く泣く地方を去らなければならぬ青年もたくさんいます。こうしたことから目を背け、条例で無理矢理押しつけるようなことをやれば、ますます逆の方向に向かうことになるのは明らかです。

提出者は「担い手確保が地域防災力の向上にもつながる」とも言いました。しかし、文化や芸術は、それ自体に価値があるのであつて、何かのために利用すべきものではありません。戦前は文化芸術が戦争に利用された。戦前、文化や芸術が、国民を戦争に駆り立てるための道具として使われました。多くの文化人や芸術家がそれによって苦しみました。提出者の言葉は、こうした過去の悲惨な歴史にもつながりかねない危惧を抱かせるものです。

今回の条例は、安倍政権が進めようとしている「稼ぐ文化への展開、文化産業の経済規模の拡大」などと同じ発想であり、文化や芸術を根底からゆがめることになりかねません。